

スポーツ国際大会における国別対抗形式

The form of competition among nations in the international sports meeting

1J02C163-0

樽野 智英

指導教員

主査 志々田文明先生

副査 石井昌幸先生

問題の所在

オリンピック、世界選手権など、スポーツの国際大会には、国別対抗の形をとって行われるものがある。これらのスポーツ大会に参加する選手は、団体競技であれば国名をチーム名として、個人競技でも国名や国旗の書かれたユニフォームを着て国家ごとに分かれてそれぞれ競い合う。私たちはそういったことに一切疑問を抱かず、毎回、普段は見向きもしないマイナースポーツに日本が勝った負けた、メダルのはどこの国がいくつ獲っていると熱中し、マスコミもそうした話題一色になる。しかし私には、国別対抗の形式はスポーツへの注目度の上昇をもたらすが、同時にさまざまな問題点をはらんでいるようにも思えた。国際友好を謳いながらナショナリズムむき出しで争うスポーツの国際大会の理想と現実のギャップに違和感を覚えていた。そこで、スポーツの国際大会において国別対抗を取りやめ、個人参加というかたちをとれば、スポーツによってナショナリズムが煽られることもなく、また国家の枠を排することで競技自体のレベルも上げることが出来るのではないかと考えた。以上の問題意識から、本研究では、国際大会における国別対抗形式のあり方を、近代スポーツ史の文脈の中で検討することにした。なお、本研究は文献研究である。

I 国別対抗形式の歴史的経緯

スポーツの大規模国際大会の元祖とも言える近代オリンピックに国別対抗形式が導入された過程について調べてみると、近代オリンピックが、その黎明期に、当時の帝国主義と植民地主義の展示の場であった万国博覧会の影響を強く受けて導入していったということが分かった。帝国主義と植民地主義といった思想が歴史的反省の上に否定されている現代においては、国別対抗の再考が必要だろうとの想いをさらに強くした。

II 国別対抗形式に肯定的視点からの考察

以下の二章では、スポーツ大会への経済的貢献、スポーツの普及、発展への貢献、スポーツの根源的な部分とのつながり、競技会の競技レベルの問題、スポーツ振興への国別対抗形式がもたらす利益、不利益など、様々な角度から国別対抗形式について考察した。

国別対抗形式の大規模スポーツ大会は、その高い注目度によって、広告収入や放映権料などの経済的恩恵がもたらされるため、もはやこの形式なしに開催することは不可能といえるまでになっている。同時に、スポーツの普及、発展、さらにはスポーツ振興にも多大な好影響をもたらすと考えられ、マイナス面を補ってあまりあるプラスの要素を持つことが分かった。グローバリゼーションの加速する現代において、ボーダレスの状況が現出しているとはいっても、近代国家(Nation State)が消滅する兆候はみられない。このことは、国別対抗形式の消滅の困難さを物語っているだけではなく、近代の産物であるスポーツの消滅の困難さをも物語っているのである。

III 国別対抗形式に否定的視点からの考察

スポーツの国際大会における国別対抗形式は、弱肉強食、成果主義、競争原理など、近代の負の遺産と言える価値観と結びついており、いたずらに選手や観客のナショナリズムを煽ることでラフプレーの原因となったり、判定などにおける不公平を引き起こしたり、ドーピングなど勝利至上主義に結びついたりしかねないことが分かった。さらに、観客を巻き込んで、スポーツの国際試合が暴動に変わってしまったケースも多々あった。

さらに、医療や福祉からの身体運動への要請に応えるべきスポーツ振興の面においても、国別対抗は、人々がスポーツを始めるきっかけとして大きな力を持つと期待できるが、この形式が内包する上述の近代的要素は、生涯スポーツの健康増進や豊かな生活の実現といった理念とは全く相容れないものであることも忘れてはならない。

IV 結論

国別対抗形式は、スポーツに対する、処方箋の無い薬である。それは、おいしく(ナショナリズムの注目度)、しかも体に良く(経済的、人材的恩恵)、しかし使い方を間違えば様々な悲劇を引き起こす毒へと変わる。そして、服用をやめる時はスポーツが無くなる時である。私たちは、この薬が適量かどうか常に気を配りながら、この先も付き合っていかなければならない。